

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	虚構性への模索：対関係のしくみを見抜くその発達
Author(s)	竹村, 房代
Citation	児童の言語生態研究 , 5 : 27 - 31
Issue Date	1972-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045056">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045056</a>
Right	
Relation	



# 本会共同調査と研究報告(3)

## 虚構性への模索

一対関係のしきみを見抜くその発達—

(原稿整理担当) 竹村房代

われた 茶わん

ごはんの 茶わんが われたので、ごみための  
わきに すてられました。だが、こんな いい  
茶わんを わって しまったのでしょうか。ごはん  
を 食べながら、よそ見をして いて、茶わん  
を 手から おとした子が いたのでしょうか。  
われた 茶わんの 一つの かけらには、ラフ  
バを ふいて いる 犬の 絵が、かいて あり  
ました。もう 一つの かけらには、ダンスを  
して いる 茶わんの 絵が、かいて ありました。  
ラフバを ふいて いる 犬と、ダンスをし  
て いる 茶わんに、ねこは、もとは 一つの  
ならべて、かいて あつたのです。茶わんが わ  
れたので、はなればなれになつたのです。  
「ぼくが ラフバを ふいて、ねこが ダンス  
を しなければ、つまらないや。」  
と、ラフバを ふいて いる 犬は、いいました。  
「わたしが ダンスを しても、犬が ラフバを  
ふかなければ、つまらないわ。」  
と、ダンスを して いる 茶わんに、ねこは、いいました。  
「つまらない、つまらない。」  
「つまらない、つまらない。」  
その うちに、雨が ふりだしました。ザーザ  
ー われた 茶わんの かけらの 上に ふりま  
した。雨に ぬれても、茶わんの 犬の  
きえません。ねこの 絵も、きえません。よこれ  
が どれて、はつきりました。ラフバを ふい  
て いる 犬は、雨に ぬれても、ラフバを ふ  
いて いました。ダンスを して いる 茶わんに、  
雨に ぬれても、ダンスを して いました。  
すると、そこへ 犬が 来ました。茶わんに  
と、のらねこは いいました。

かいで ある 絵の 犬では ありません。ほん  
とうの 犬です。大きな のら犬が 来たのです。  
のら犬は、はなを ひくひくさせながら、茶わ  
んの かけらを かぎました。  
「ふん、なんだ。かけた 茶わんか。」  
と いいました。  
「犬さん、大きん、ラフバを ふいて ください。」  
と、かけらに かいて ある 絵の 犬が、い  
ました。  
「わたし、ダンスを しますから。」  
「なんだって。ラフバを ふいて くれたって。」  
と、のら犬は いいました。  
「おれは、ほんとうの 犬だ。ほんとうの 犬は、  
ラフバなんか ふかないんだ。それに、ほんと  
うの 犬は、ねこが きらいだ。ごはんつぶ  
一つ ついて いない 茶わんの かけらなん  
かに、用はないんだ。」  
そう いつて、行って きました。  
しばらく すると、こんどは ねこが 来まし  
た。茶わんに かいて ある 絵の 犬では  
ありません。ほんとうの 犬です。大きな の  
らねこが 来たのです。  
のらねこは、のどを ゴロゴロ ならしながら、  
茶わんの かけらを かぎました。  
「ふん、なんだ。かけた 茶わんか。」  
と いいました。

「ぼくたちは、絵の 犬や 絵の 犬に 生ま  
れて きて、よかつたね。」  
と、絵の 犬が、絵の 犬に いいました。  
「そうよ、そうよ。ほんとうに よかつたわ。」  
と、絵の 犬も、いいました。  
「わたしたち、いつだって なかよしで、ラフ  
バを ふいたり、ダンスを したり して、い  
つしょに くらして きたんだわ。それなのに、  
こんなに われて、はなればなれになるなん  
て、かなしいわ。かなしいわ。」  
そう いつて、絵の 犬は なきました。と  
いつても、ほんとうは、雨の しずくが、茶わん  
の かけらを ぬらして、ぼろぼろ こぼれただ  
けでした。

「ねこさん、ねこさん、ダンスをして ください。」  
と、かけらに かいて ある 絵の 犬が、い  
ました。  
「ぼくが、ラフバを ふりますから。」  
それに しても、だれが 茶わんを わつたの  
でしょう、こんな いい 茶わんを。  
(ひらつかたけじ)

『研究の意図』

材料 「われた茶わん」 光村出版 二年上

ひとつの対（この場合茶わんにえがかれた犬と猫）であったものが、こわれて半分ずつになってしまった。もともと、一対であつた絵の犬と絵の猫が半分、即ち二分の一になり、別の対（この場合本ものの犬と猫）の半分をもつてきても、そこにはひとつの対は成り立たない。話の構成に従つてその対の関係をまとめるところの通りとなる。

・茶わんの中の描がされた犬と猫……対

（本物の犬と猫……別の大対）

絵の猫・本物の犬……類似の大対

絵の犬・本物の猫……類似の大対

・絵の犬と猫……対

このしくみをみぬき、ひとつの作品としてまとめる構成力が、どの学年で育ち、どのようにして、対の関係を発見して行くかをみとどけようとしたのである。

〔調査方法及び調査対象〕

原文の中より、地の文を全部カットし、会話文だけを印刷して提示した。

〔指示事項〕

「何かが話しています。あいた所を書きたすと、ひとつのお話になります。うまく作つてください。」

学年 組 氏名 ( )

(調査対象) 調査期間 (昭和四六年五月～六月)

二年	一年	学年	校名
○	○	相模原市	清新小学校
		相模原市	相模原小学校
		横浜市	横濱田小学校
		横浜市	三つ沢小学校
○		横浜市	汲横沢浜小学校

学特級	六年	五年	四年	三年
○	○	○	○	○
	○	○	○	○
		○		○
		○	○	

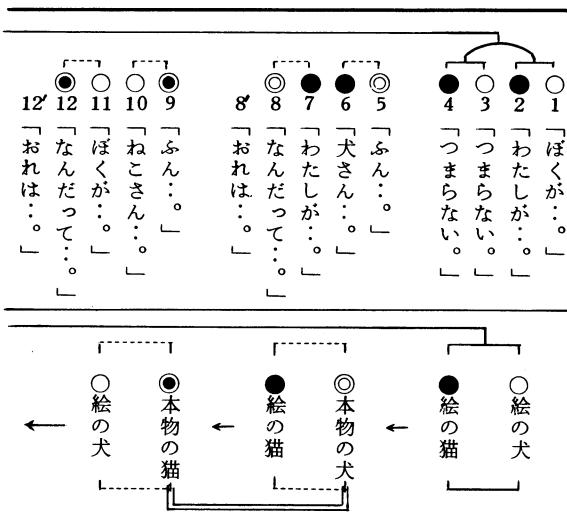
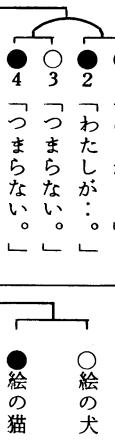
一集計

一年=二〇名 二年=三一名 三年=四〇名 四年=四〇名 五年=四〇名 六年=四〇名 計=二二一名

〔調査集計の方法〕

■何と何の会話をとらえたかによりそこに対のとり方をみとけていくために、原文にそつて、一応会話を次のような記号におきかえてみた。

(表1) (原文の各会話の後の部分は略す)



記号	種別	4種	
		1	2
○	絵の犬と絵の猫	1	
●	絵の猫		2
○	本物の犬		3
●	絵の犬		4
○	本物の猫		
●	絵の猫		

(表3)

■(表2)に従つて、子どもたちが何を対としてとりどこまで構成し得るかを見るために集計を行つた。

〔調査結果〕

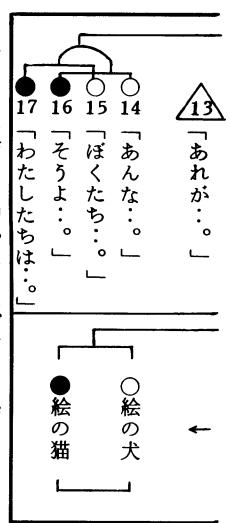
○先ず一年～六年までの二二一名中原文にそつた完全解答を示した者次のようであった。

記号	種別	4種
○	絵の犬と絵の猫	1
●	絵の猫	2
○	本物の犬	3
●	絵の犬	4
○	本物の猫	
○	絵の猫	

■(表2)に従つて、子どもたちが何を対としてとりどこまで構成し得るかを見るために集計を行つた。

〔調査結果〕

○先ず一年～六年までの二二一名中原文にそつた完全解答を示した者次のようであった。



一年では0を示しているが、これは全体的に対といふ意識つまり二組の組みあわせだという構成力が乏しいからであろう。但し、各場面毎の単独的な「犬・猫」

「ぼく・わたし」という被我関係はおぼろげながらも捉えられているようである。三年に於いてかなり高率を示しているのは（調査校の地域差を考慮に入れるとしても）、こうした対の意識が直観的に働く学年との見方もできるわけである。これは後日検討を要する。

◎次に原文に完全解答とは云えないが、対のとり方としてはやや異ったものではあるが、話としてのつじつまがあつっていたもの。細かく言うと

(表4)

①	○○	：	対	学年
②	○○	○	対	学年
③	○○	○	対	学年
④	○○	○	対	学年
			0 %	1年
			6 %	2年
			0 %	3年
			2.5%	4年
			2.5%	5年
			12.5%	6年

②と③とを異種の対として、あるいは③は②の逆の対だとして把えることは出来るが、①と④とを関係づけることはむずかしいということである。六年生に多いのは、やはり場面ごとの関係どりにおいてその構成を完全とはいえないが見ぬく力があると言えようか。◎対のとり方が①～③までをひとつとなし④にきてはじめて異つた対に気づき一応の話の構成としてはできているもの。

(表5)

①	○○	：	対	学年
②	○○	○	対	学年
③	○○	○	対	学年
④	○○	○	対	学年
	15 %	1年		
	30 %	2年		
	5 %	3年		
	15 %	4年		
	25 %	5年		
	22.5 %	6年		

(表7) (13番が原文における構成の完全解答である)

14	(13)	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	対のパターン 記号の意味
(いかなる対にも気づかない)	○○	○○		○○		○○	○○	○○	○○					(絵の対)
	●○		●○	●○	●○	●○	●○	●○	●○					絵の(異・本物)
	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○					絵・(逆・異・本物)
	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○					絵の(一がなつ半た)
25%				5%									1年	る( )数が内字、のはそ数部こ字分だけ他のの完部答答分を示すくらか異なる
6%	14%												2年	
17.5%	27.5%			2.5%				2.5%	2.5%				3年	
7.5%	7.5%							2.5%	2.5% (5%)				4年	
5%	20%			5%						(7.5%)			5年	
2.5%	17.5%				2.5%	2.5%				(2.5%)			6年	

(④)に於いてはじめて絵の犬と絵の猫の対がされたということは、「それをみていた絵の犬と絵の猫」とかいいました。」とあるのであるが、(①)～(④)までの関係の中ではとらえていない。つまり、このとり方は、最後にきて二組の対であることははじめて気がつき、急いでつじつまをあわせるのである。でも、一年から六年までこのペーパーが多いことは、二組の対がこの話の中にはあるとまでは見ぬくけれども、その二組の対を交互に半分半分組み合わせてみると、話の仕組みにまでは思い至らない。しかし、この段階までなら一年生ですら15%前後までいっていることは、部分内の組み合わせ、いわば男と女、犬と猫等の単独の対から、やがて場面ごとの対関係へと発展していく道筋があるのだと教えられたことは確かである。

○四つの対の構成であるにもかかわらずひと組としかとらえられなかつたが、一応のつじつまのあつているものがみられたものをひろつてみた。

(1) ○ ●	(2) ○ ○	(3) ○ ●	(4) ○ ●	対	学年
				5%	1年
				11%	2年
				10%	3年
				10%	4年
				5%	5年
				10%	6年

右の表の者は犬と猫というひとつの対としてとらえ途中その犬と猫とが茶わんを相手に対話をするといった話の構成でしかとられていない。いわば相手交換はなされているが、対の半分ずつのおきかえとしての意識に浮んでこなかつたということである。

○この資料を通し、対の構成を原文（表2）にてらして、四つの対の完答（部分も含む）を原文にてらして、四つの対の完答（部分も含む）を

のみ表にした。これから同がえることは、第一に(13)に示すように一年生には完答がりに對して、対に気づかない者が14に示すように四分の一いることであった。次に1に示すペーパーがすくないことは、文の最初から絵の犬と絵の猫という抽象化した対のとり方は、まったくむずかしいのではなかろうか。同じく2、3にも同じことがいえよう。だが4に於いては三年と六年まで対がとれているのは、最後にきてはじめて対に気づく思考が働き、云いかえるなら、最初からの連想が中断され、この文の構成の一部分即ち二組の対の組みあわせであることに気づいたといえよう。6にみる二組の対に気づき、異種との対、その逆の対まではそれたが、四つの対としての関係まで及ばなかつたのは、部分的対応はとれるが、全体の構成はとりにくいということであろう。同じ部分内での対応でも8、9にみられる後半でのものは更らにむずかしいといえよう。7、12、に示されるペーパーは、やはり0といふのは、全体の関係をみぬくことの困難さを示すのではなくだろうか。だが、10、をみると、一年、三年、六年にその対の関係をとらえている者がいることは、やはり子どもにとって、始めと終わりは一番視点がとまりいわゆるつじつまをあわせるということを知つてゐる子のとらえ易い傾向といえよう。13に示すように完答の者及び部分内での対のとり方が、高学年に多いことはやはり思考の発達の段階が示されている。反対に、対とそれいがたつているが、いろいろな対のとり方がかなり出ていた。それ等を別表とし（表10）（表13）にまとめ、構成及び対そのもののとり方の発達をも合わせてみることにした。いろいろと対のとり方があつたので、一応記号化（X・Y）としてまとめた。どんな対をとつたか（表9）の通りである。

X・Y		記号	一年	二年	三年	四年	五年	六年
	女男	わばわたくし	少少	女年				
	女男	わばわたくし	少少	女年				
弟兄	女男	わばわたくし	少少	女年				
	女男	わばわたくし	少少	女年				
男の子	女男	わばわたくし	少少	女年				
の子	女男	わばわたくし	少少	女年				
女男	女男	わばわたくし	少少	女年				

2 ○ ●	1 ○ ●	1 1
↓	↓	2 2
↓	↓	3 3
○ ●	○ ●	4 4
25%		一年 一年
30%	6%	二年 二年
5%		三年 三年
25% (25%)	2,5%	四年 四年
30%	2,5%	五年 五年
25%	125%	六年 六年

12	11
X Y]	○○]
5%	5%
	23%
2,5%	12,5%
2,5%	12,5%
	5%
	17,5%

(表13)

10	9	8	7
X Y]	○○] <td>X Y]</td> <td>X Y]</td>	X Y]	X Y]
○○] <td>↓</td> <td></td> <td>X ○]</td>	↓		X ○]
↓	↓		Y ○]
↓	X Y]	X Y]	X Y]
10%			10%
	3%		12%
5%	5%		5%
2,5%		2,5%	17,5%
			12,5%

(表13)

6	5	
X Y]	○○] <td></td>	
X ○]	○○] <td>X -</td>	X -
Y ○]	○○] <td>Y -</td>	Y -
		10%
(3%)		
2,5%		
2,5%		
		3年
		5% 4年
2,5%	17,5%	5年
		20% 6年

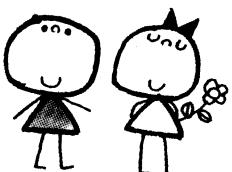
(表12)

4	3	
X Y]	○○] <td>1</td>	1
○○]	○○] <td>2</td>	2
○○]	○○] <td>3</td>	3
○○]	○○] <td>4</td>	4
		10%
(3%)		
2,5%		
2,5%		
		1年
		2年
		3年
		5% 4年
2,5%	17,5%	5年
		20% 6年

(表11)

(表9) の X・Y の記号に入るものを対と認め次の表10と表13の通りにまとめられた。

ら対そ なとの いな他	茶 犬わん
人 犬 間	き う つ さ ね ぎ
み ん 男 な	他 ひ の と り 入 り
犬 み た ん ち な	友 女 だ ち
	茶 犬わん
	茶 犬わん



(表9) に於いて気づいたことは、一年／六年までを通じて、ことばこそ異なるが、男・女という対どりをしていくことであろう。これは、自然の中で第一に学びとする最初の対の意識といえよう。それは、特に(表10) / (表13)を通して、かなりの高率を示していふことから、知らしめられた実態といえよう。特におどろかされたとは、(表12) 7に示されている実態であった。対・どりが男女及び本物の犬と猫との二組をみごとに四つの対の構成になしとげていて、しかもかなりの高率を一年から示していることであった。対の思考の出発が男・女からとは、全く気づかなかつた面である。

整理担当 竹村房代